

「車椅子で訪れた日本からの婦人も」

主人公アンの想像力と、とめどもない楽しいおしゃべり。何事も前向きにとらえ、はつらつとした姿からはみずみずしい生きささえも与えられるような気がします。それに100年前のカナダの生活描写は、自分たちシニア世代の半世紀あまり前の子ども時代をも思い出させてくれます。

その一：

孤児院にいたアンは、いろんないきさつがありました。結果的にマシュー、マリラ兄妹の家で育ててもらえるようになり、学校にも通えるようになりました。

登校の初日に<事件>は起こりました。クラスの男の子ギルバートから、彼女が最も気にしている赤毛を「ニンジン、ニンジン」とからかわれたのです。怒ったアンは、使っていた石板を彼の頭上に打ち下ろしました！

石板といえば、終戦後3年目に私が入学した長野県の小学校のクラスでも使っていました。すべてに物資欠乏の時代でした。ノートは茶色がかかったざら紙。教科書の一部さえも兄からの“おさがり”でした。つぎのあつた衣服は当たり前。昼食の弁当を持ってこれられない仲間もいました。

ギルバートは頭脳も性格もよい好男子。アンの反目は続きますが、最終章で仲直り。後に続く『アン・シリーズ』では、二人は結婚をし幸せな家庭を築いていきます。その出だしにこんなエピソードの伏線を置いたたぐいまれな構想力！



ミュージカル出演のアンと

その二：

ときどき出てくるアンの無鉄砲さは夏目漱石の『坊ちゃん』をほうふつとさせます。正義感にあふれ負けん気の坊ちゃんは「そこからは無理だろう」とからかわれて、2階から飛び降りて怪我をしました。

アンはダイアナの家のお茶会で、仲間とのひよんな駆け引きから、引くに引かず、屋根に上り、結果的に屋根から転げ落ちて足首を骨折してしまいました。アンを心配するマリラ。初めは家におくことを断っていたマリラも、この時点ですでにアンが自分たちにとってどんなに大切な存在になっているかに気がつくのです。

そのほか、ちょっとした取り違えで、ダイアナにお酒(果樹酒)を飲ませてしまう話。小船に横たわって川に流されていくエレーン姫のまねをして溺れ死にそうになり、<心の敵>ギルバートに救出される話など、エピソードに事欠きません。日本文学の傑作に類した点があるのも個人的には親しみを感ずるところです。

島をめぐる旅のなかで車椅子の日本婦人Kさんに会いました。宮崎から羽田、成田、トロントの空港を経由して州都シャーロットタウンへ。60歳の誕生日を祝い、娘二人が旅をプレゼントしてくれたのだといいます。リウマチで足が悪く娘の一人が付き添って人生で初めてとなる海外旅行でした。

「アンは40年前に読んで以来、その舞台を訪ねるのが夢でした。プリンスエドワード島は、牧歌的な光景で心が洗われる思いです。空気も澄んでいて、持病のリウマチもあまり気にならなかった。何があってもくじけないアンの生き方はずっと自分の人生の支えでもありました」

夢を抱いて努力していれば、いつかは実現できる。アンが教えてくれた一つの例のような気がしました。



牧歌的で美しいカナダ・プリンスエドワード島の情景



清水武 Takeshi Shimizu 旅行作家
世界文学紀行を定年後のライフワークに作品の舞台を訪ねている。東京都・昭島市在住

<http://homepage2.nifty.com/donky/>